追　悼

門田裕一：山崎　敬先生（1921–2007）
Yuichi KADOTA: Dr. Takasi Yamazaki (1921–2007)

山崎　敬先生は2007年２月２日，急性心筋梗塞のためお亡くなりになりになりました．謹んでご冥福をお祈りいたします．

先生は大正10（1921）年１月６日に神奈川県足柄下郡酒匂村（現，小田原市）でお生まれになりました．昭和14（1939）年旧制新潟高等学校に入学された後，同17（1942）年に東京帝国大学理学部植物学科に入学されています．太平洋戦争のため，二年繰り上げて同19（1944）年９月25日に卒業，同年10月１日に理学部副手として採用されました．そして同12月15日には東部第1901部隊に召集．同20（1945）年５月31日には召集が解除され，同23（1948）年４月１日には副手として新制の東京大学に戻られています．同24（1949）年，理学部助手，同32（1957）年４月17日　理学博士の学位をとられ，同33（1958）年，理学部講師，同37（1962）年，理学部助教授，同57（1982）年には理学部教授となり，同年退官されました．

先生は，昭和20年横浜市大空襲で罹災するまで，お父上の仕事の関係で横浜で過ごされました．「六人兄弟で，兄二人，敬，妹，弟，妹．温厚な父としっかりした母と兄妹に囲まれた堅実な良い家庭で，戦中戦後の苦しい時代も支え合って過ごしたと思う」とは山崎冨佐子氏の述懐です．その後東京都町田市に移り住み，昭和30年に結婚され，東京都中野区上鷺宮にお住まいを移されました．

先生は南西諸島など主に南方のフロラに深い関心をもたれ，熱心に研究されていました．先生の調査歴を列挙しますと，屋久島（1961,



元気に登山される山崎先生（知床半島羅臼岳にて，1984年８月26日，門田撮影）

1962，1963)，インド北部，ブータン，ネパール（1967；原　寛，金井弘夫，大橋広好，村田　源らの諸氏と共に)，沖縄（1968，1971)，小笠原（1968，1969，1970，1985)，北硫黄島（1968)，台湾（1969；許　建昌，難波恒雄の両氏と共に玉山，南湖大山など一ヶ月間)，大東島（1972)，海南島（1981)，韓国（1982；李　永魯氏と共に智異山：1996；李　愚桔氏と共に雪岳山など）と多岐に渡っています．

しかし，先生が北方のフロラにも関心をもっておられたことはあまり知られていないようです．1980年代に私が北海道の高山フロラ研究に打ち込んでいた頃，ポロヌプリ（佐藤　謙氏と共に)，夕張山地（山崎冨佐子氏，杉山明子氏らと共に)，日高山脈，石狩山地，知床半島などにお供させていただきました．先生の山歩きの確かさは，飯豊山地をホームグラウンドとして活躍された旧制新潟高等学校山岳部時代に培われたもののようです．1980年代といえば先生が60歳代の頃です．私が同じような年代になった時，同様な山登りができるかどうか自信がありません．

分類学の分野では，先生はゴマノハグサ科植物の分類に多大な貢献をされました．その他にも主に合弁花類について多くの著作を残されています．私にとって忘れられないのは，東アジアのツツジ属のモノグラフ，A Revision of the Genus *Rhododendron* in Japan, Taiwan, Korea and Sakhalin（179 pp., photos 1–22, maps 1–26, pls. 1–17, 1996，津村研究所刊）です．及ばずながら，この本の編集には私が携わったからです．

重ねて先生のご冥福を心からお祈りします．

山下貴司：山崎　敬博士（**1921–2007**）
Takashi YAMASHITA: Dr. Takasi Yamazaki (1921–2007)

元東京大学教授，山崎　敬先生は平成19年２月２日，急性心筋梗塞のため逝去された．奥様によるときわめて安らかな死であったという．葬儀などは親族だけで行われ，大学や学会の関係者には連絡されなかった．

山崎先生の弟子のうち最年長の者は筆者なので，本誌から追悼文を依頼された．それは当然であるが，いざ書こうとしてみて改めて気付き愕然としたことがある．筆者は山崎先生の一部の側面しか知らないのである．これでは後輩の森田竜義氏や井上　健氏にもお願いしなければ，山崎先生のトータルな学問と人間像を描けないのか，とも考えた．ところが，先生の学問を最もまっとうに受け継いでいたはずの井上氏は，2003年，サハリンでの植物調査中に事故で亡くなられた．これは先生にとっても大変な痛手だったであろう。弟子達の数は少なく，それを合わせてもおそらく先生の全貌は描けない．ここはとりあえず，筆者に見えた範囲での先生を伝える他はない．それでも足りないと思われる方は，また別の機会に山崎先生について書いていただきたい．

植物学は，金には縁がない代りに，趣味と専門とが一致しやすい学問である．山崎先生はその典型であった．他の趣味などなく，常に全力をあげて植物学の研究に取り組まれ，飽きることがなかった．但しその研究とは，いつも同じことの繰り返しでは決してない．むしろいくつかの，素人目には全く違うように見える分野，乃至いくつかの局面の組合せであって，先生の頭の中だけでそれらの諸分野が関係づけられていた．筆者のような弟子はそれらの分野をすべて受け継いだ訳ではないのだが，とりあえず筆者の不得意な分野も含めて列挙してみたい．

１．山歩きによる植物の観察と採集

山崎先生は戦時中に旧制新潟高等学校に在学され，その山岳部で飯豊，朝日連峰を中心に歩き回られた．これが山崎先生の原点になっているらしい．いざとなれば，若い弟子達よりはるかに体力があるのだが，それを誇示する訳でなく，むしろ冷静に無理をせず山で生きる術を心得ておられた．つまり本物の山男であった．山崎先生の真骨頂は，自然界で見るあらゆる植物に関する広範かつ正確な知識